

特別寄稿 ● 上川庄二郎
(神戸市企画調整局調査部長)

「阿房列車」 松山へゆく

「阿房列車」の最後部に連結された
展望車 (マイテ 49 2)



「阿房列車」 松山へゆく



レトロファッションの
参加者たち

岡山の町づくりを考える市民グループが中心となつて、内田百閒生誕百周年記念祭準備会が発足した。その初めての行事として、百鬼園故郷阿房列車が運転されたのは昨年（昭和六十三年）一月十七日のことである。

岡山発和気ゆき特別仕立てのディーゼルカーは、多くの百閒ファンを乗せて澄み切った冬晴れの吉備路を快走した。先生好物の大手饅頭の差し入れや三好野の仕出し弁当、辨当に嬉しがり、車中談義に花を咲かせながら和やかに用事のない旅を楽しんだ。

帰路は「阿房列車」に出てくる吉井川の曲がった鉄橋の車窓風景に見入りながら、萬富駅に途中下車、幼い頃おばあさんによく連れられていったという百閒ゆかりの三谷の金剛様に参詣する。また岡山では百閒先生のお墓にもお参りするなど、新しい出会いと発見に胸をときめかせたことを昨日のことのように思い出す。二回目の百鬼園故郷阿房列車は、その二か月後の三月にさよなら宇高連絡船の旅を兼ね宇野線で運転された。その時は折悪しく参加できなかったので次の企画を首を長くして待っていた。

昨年の暮れのこと、「来年二月十一・十二日に第三回の阿房列車を、百閒先生の恩師漱石ゆかりの松山に向けて走らせる」という知らせが届いた。しかも百閒先生の大好きだったへはとの展望車マイテ492を聯結してゆくとは嬉しいではないか。おまけに、と言つては失礼だが「阿房列車」にはいつも百閒先生のお供をしておられた平山先生が奥様同伴で、遠路はるばる東京からお越しになるという。平山先生にはぜひともお目にかかりたい。だから、これは参加しない訳には参らない。女房に「どうする？」と聞くと、「私も行くわよ」と二の句の返事。あ

とは参加の手続きを済ませてその日を待つのみとなつた。

晴れて当日は、三日連続の雨も上がって冬型の気圧配置となつた。早朝の新幹線で岡山駅に駆けつけると、昨日から岡山に泊まっておられた平山先生ご夫妻がもうお見えである。周囲には新聞社やTV局が大勢群がっている。「これはにぎやかな阿房列車になるなあ」と眩しきながら、まずは平山先生にご挨拶を申しあげる。

三三五と集まってくる連中には、鳥打ち帽の商人、勲章にサーベルの明治の軍人、紺緋に袴姿の中学生、羽織袴の六高生、リボンに袴の女学生、トランク下げた毛皮の襟のインバネス、山高帽に真丸眼鏡の口ひげをたくわえた明治の紳士、それにエプロン掛けのカフェの女給から詰襟の制服に身を固めた明治と大正の車掌までそれぞれに趣向を凝らしているのが目を引いた。なるほど、車内でレトロファッションコンテストをやるという触れ込みだったから、このような出で立ちが揃ったというわけだ。あとで聞いたのだが、軍人さんの衣装は陸軍少佐だったお祖父さんのもので、その制服・制帽姿にサーベルを下げて自宅からやってきたということだった。その道中の勇氣に敬意を表しておこう。

10番線ホームで、松本岡山市長、大藤百鬼園祭実行委員会会長（前岡山大学長）、平山先生、守谷岡山駅長らのテープカットのセレモニーのあと、大勢の鉄道ファンに見送られてタイムスリップした阿房列車はビーツという暖味な汽笛を鳴らして岡山駅を後にした。

この列車はDE10に牽かれた14系客車三両とマイテ492の編成で、百三十名余りの「阿房」仲間を乗せて松山

「阿房列車」 松山へゆく

・筆者の奥様(編集部注)

まで走ってくれることになっている。行き違ったり追い越されたりした列車は二十八本にも及ぶ。お先にどうぞといったところだ。しかも、列車も「阿房」よろしくマ ITE 492 を従え愛嬌を振りまきながら走るものだから、沿線でも結構鉄道マニアの餌食となってパチリパチリとやられる始末。そんな走り方をしていくから、岡山から直通の特急列車に乗れば、三時間九分のところを、何と五時間二十五分も費やして松山に着くという鈍行振り。しかし乗客は乗客で、用事のない旅を楽しんでいるのだから、不服をいう者などいるはずもない。それどころか、むしろゆっくり走ることを喜んでいくかのようでもある。もちろん、カラオケなどは無用である。

発車して約一時間、やつとという言葉がピツタリの快走振り?で瀬戸大橋に差し掛かる。しかも、その瀬戸大橋もゆっくりゆっくりと渡ってくれる。マリンライナーだとゴーツという音とともに走り去って眺望する間などないところだが、今回はそれを存分に満喫させてくれる。

瀬戸わたる阿房列車の早春賦
やり過ぎ列車多かり春の海

(恵美子)

車内では、例によって大手饅頭の差し入れがあり、展望車に行けば抹茶のサービスまでであるという実行委員会のみなさんの気の配りようである。突然、TVカメラがざわつき始めたと思うと、くだんのレトロ車掌氏が検札にやってきた。「阿房列車の乗客の皆様、まことに恐れ入りますが切符を拝見させていただきます」とお上の鉄道にしては丁重である。ややあって、またもTVカメラが騒々しい。何かと見ると、今度はレトロファッションの車内ねり歩きである。こんな調子だから「阿房」共は退屈す

る暇などありやあしない。平山先生ご夫妻も今日ばかりは百閒先生から解放?され、展望車でゆつくりくつろいでいらつしやる。多分、百閒先生のお供で「はと」に乗って大阪に行かれた頃のことを偲び懐かしく思い出しておられるのだろう。

レトロ調競ひて車中春めけり
東風そよぎレトロ華やぐ展望車

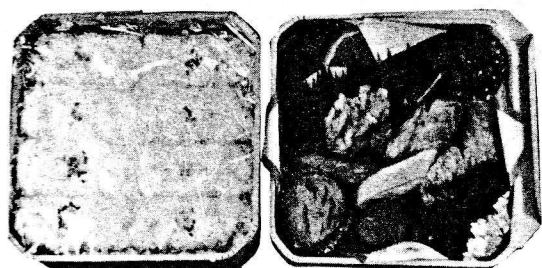
(恵美子)

やがて、やや早昼の弁当が配られてきた。お馴染みの三好野の二段重ねの仕出し弁当だ。掛け紙も阿房列車と百閒先生のイラスト入りと別誂えである。それもそのはず、実行委員会の佐野氏のデザインなのだ。彼はれっきとしたグラフィックデザイナーだからお手のもの。しかし、こんなことも全て無報酬でやっているから「阿房列車」を走らせることができたのだ。お蔭で私なんかはそんなことにはお構いなく、早速に弁当の紐を解いて百閒先生よろしくワンカップで一献といく。「飲んでいるお酒も六十キロか七十キロで飛んでいる。料理屋にはこんな早いお酒はない」(内田百閒「阿房列車」)。今日ばかりは、女房殿も公認だ。

お腹の皮がつっぱれば上下の脛がひつづくのが常識というもの。しかし、ここで午後の講義があるというからたいへんだ。お医者さんでありながら、漱石の研究者としても高名な大藤会長の講話「漱石と百閒」が一号車では始まるという。これでは寝てなんかいられない。それにしても車内での講義とは、なかなか時間を有効に使ってくれる。内容は大学の講座顔負けの比較文学論で興味深く聞き入った。

あとで大藤会長曰く。「手塚治虫さんは立派な方で

三好野の二段重ね
仕出し弁当



ねえ。医学博士ですが、漫画家で生涯を終えられた。頭のいい方だったですよえ」と。いやいや、大藤会長も大した文学者であり、俳人でもありますよ。単線ばかりの四国の鉄道に、臨時列車を乗り入れるのだから、そうそうスムーズに走れるわけがない。松山まであとひと駅という三津浜にまでたどり着きながらここで二十一分の列車待ち大休止。急行列車と交換し、次に後からの特急列車に追い越され、しばらくしてまた普通列車と交換してやっと発車と相成った。しかしこの間、ホームは恰好のレトロファッション臨時撮影会場に变身し、私なんかは平山先生と一緒に写真を撮らせて頂くのがやっとといったところ。アツという間の二十一分だった。

こんなことで、列車は勇躍五時間二十五分を掛けて松山駅に到着した。「松山へようおいでたなもし」と大書された横断幕が拡がる中「坊つちゃん列車を走らせる会」のみなさんなど多くの人の出迎えをうける。予期せぬたいへんな歓迎ぶりに一同感激。

ここはひとつ地元の新聞の表現を借りるとしよう。

「レトロづくしの「阿房列車」来松」の見出しのもとに、「ここが、小説「坊つちゃん」ゆかりの松山市——。作家、内田百閒の生誕百周年と百閒の出身地、岡山市と松山市の市制百周年を記念したイベント列車「百鬼園故

郷阿房列車」の一行が十一日松山市に到着。

一行は記念実行委員会会長の大藤真、文学者の平山三郎さんらのほか、百閒ファン計一三〇人。参加者は、百閒が活躍した明治・大正時代のファッションに身を包み特急「へと」に使用されていた展望車（マイテ492が松山に來たのは初めてのこと。筆者注）を連結したレトロづくしの阿房列車で岡山を出発。午後1時57分に松山駅に降り立った。

早速駅前で歓迎式典。矢絰のミス・マドンナのお嬢さんが大藤会長らに花束を贈呈。両市代表が挨拶を交わし、記念品を交換したあと、「市内電車を貸切で旅行がしたい」という百閒の夢を実現させ、伊予鉄道市内線を貸切で道後温泉に向かった。

このあと一行は子規記念博物館を見学。和田茂樹・同博物館館長の記念講演「夏目漱石と松山」を聞いたり、松山市の俳句グループと俳句交歓会を開くなどした（産経新聞、平成元年二月十二日愛媛版朝刊）。ざっとこんな具合である。

記事にもあるように、道後温泉に着いて子規記念博物館を見学し、和田館長の記念講演を聞いてから宿に向かった。さきの大藤会長の講演と合わせ、今日は随分賢くなったような気分になる。

「阿房」連中は、宿に着くと早速温泉で体をほぐし、ひと息入れて今夜のメインイベントである記念宴会に移る。車内で催されたレトロファッションコンテストや百鬼園文集百謎題の解答者の表彰式など、岡実行委員長の百閒ばりのユーモアたっぷりな司会が続いた。しかし、その極め付けは、何と言っても「平山先生への講演料借用

伊予鉄道市内線（道後温泉駅付近）



漱石ゆかりの道後温泉本館



のお願いの儀」なる行事だった。この辺のくだりも、借用証書の原文を借用して紹介するでしょう。

『謝礼借用証書』

ヒマラヤ山系殿

ヒマラヤ山系さんにおかれましては、百鬼園祭実行委員会のたくらめる百鬼園故郷阿房列車へ坊つちやんの故郷「松山」を訪ねて編の趣旨に賛同され、はるばる東京よりお出で頂きました。

しかし委員会の謝礼たるや、ようやく往復の旅費を支

弁するにすぎず、本来なる謝礼の部分は無きに等しい状況です。借金先生、いや百間先生の精神を奉ずる者として、甚だ残念な限りです。

そこで、実行委員会としては、錬金術が成就するまでの間、ヒマラヤ山系さんに対し、一、金何^{なにか}万円也の謝礼借用証書を差し出す事により、来るべき将来（期日未定）支払う事を約束致し。

平成元年二月十一日

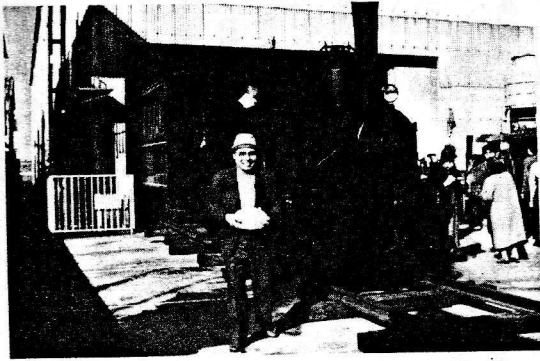
百鬼園祭実行委員会委員長 岡 将男 印

明けて翌朝は、松山「野の会」の皆さんと俳句の交歓に出掛ける高尚なグループと、どこまでも「阿房」な坊つちやん列車に試乗するグループに分かれて行動することになった。もちろん私は「阿房」グループである。旅館のマイクロバスに分乗した「阿房」グループは約四十人。もちろん平山先生ご夫妻はこちらにいらつしやる。二十分ほどバスにゆられてY工業に着く。社長さんを先頭に、またも「松山へようおいでたなもし」と「坊つちやん列車を走らせる会」のみなさんの歓迎をうける。早速記念品の交換。実は、坊つちやん列車はこの社長さんの道楽（失礼！）で、明治時代に伊予鉄道で活躍していたクラウスを復元したものである。もちろん客車も二両^{れん}連結している。ゲージは当時ナローだったが、今回の復元ではJRのゲージに合わせているから完全に元のままとはいない。これは、色んなイベントへの出展を考えてのことだそうである。

「全速力で走れば、時速六十キロぐらいは出ますよ」とは、社長さんの弁。私たちの試乗のために、早朝からカマを焚いて蒸気を上げてくださったって由。ここは感

「阿房列車」 松山へゆく

「坊つちやん列車」の前で
記念撮影する筆者



謝、感謝。各人交代で試乗したり写真を撮ったりとそれぞれに汽車キチ振りを發揮して、坊つちやんがタオル片手に道後温泉に通った情緒を楽しむこと約一時間。別れを惜しんで帰途につく。
(庄二郎)

一方、「俳句」グループは朝食も早々に八時にホテル玄関に集合。大藤会長、世話役の佐野さんを先頭に総勢十名、漱石ゆかりの道後温泉本館に向かった。ここでは誰もが入浴料を払わなければ上げてもらえないとのこと。さすが温泉本館の格式ノと変なところに感心する。とにかく「野の会」の人々に迎えられて二階へとおった。こゝもNHKや地元の南海放送のカメラが撮影に來ている。お互い緊張の面もちで自己紹介のあと、一人三句ずつ投句し五句ずつ選句した。互選上位には地元と当方の各々から二句ずつ入ったので面目を施した。

綾取りの橋の長さよ
春の汽車

(野の会)

坊つちやんの
髭びんと跳ね春の蝶

(野の会)

春浅き道後の街の
下駄の音

(百鬼園会)

句碑に添ふ
紅梅ありて
こゝは伊予

(恵美子)

最後に、大藤会長から百鬼園故郷阿房列車訪松記念のユニークな百鬼園先生のイラスト入りの額(もちろん、佐野さんのオリジナル作品)が贈られて和やかなうちに交歓会は終わった。
(恵美子)

帰りの「阿房列車」は、昨日の編成のままで折り返すため展望車が先頭車になってバックで走ることになっている。もう昔の転車台もなくなっているからこれもやむを得ない。それでも「は」とに聯結されて活躍した頃の展望車は、こんな長い距離を後ろ向きに走ったことはないだろうにと思うと何だかわいそうな気がしてならない。帰りもまた同じ路線をたどる。行き違ったり追い越されたりした列車は三十二本、行きよりも三十分長く五時間五十五分掛かって岡山駅に戻った。お互いに名残を惜しみ再会を願って散会した。

このようなことで、昨日今日と連日いささかカルチャーショックを体験しての百鬼園故郷阿房列車へ坊つちやんの故郷「松山」を訪ねて編の旅であった。

次回五月は、いよいよ百周年の本番である。実行委員会の方々は、このために東京発岡山ゆきの「阿房列車」を仕立てて東京の百鬼ファンを呼び寄せようと秘策を練っている。折しも岡山市制百周年。これに花を添えるためにも、この「阿房列車」をぜひ成功させて欲しいと念じている。
(庄二郎)

(一九八九年二月十一〜十二日)

著書 写真集「汽車の詩」(一九七五年)

「汽車の詩」国鉄全線乗りある記(一九八六年)